

## 仮設住宅に暮らす子どもたちのエンパワメントを目指した支援プログラム

### — 仮設住宅の訪問を通して —

○ 東北福祉大学 阿部 利江 (7795)

三浦 剛 (東北福祉大学 1684)

コミュニティ・エンパワメント、支援プログラム、仮設住宅訪問

## 1. 研究目的

東日本大震災以来、日常的に活用されてきた社会福祉機関やサービスなどの資源、関係者とのネットワーク機能が不全となり、これまでに経験のない出来事に直面する混乱の中で、被災者への支援が続けられてきた。そこでは、生活基盤を揺るがす課題が突き付けられ、個人、家族、集団と被災した地域住民に応じたソーシャルワークアプローチが必要と理解しながらも、アプローチの困難さと葛藤し続ける福祉関係者の姿を目にしてきた。

報告者らは、これまでも仮設住宅のコミュニティづくりなどの支援活動をおこなってきたが、その経験を知ったある地区の主任児童委員より、担当地域の仮設住宅での子どもたちの生活支援への協力が求められた。主任指導委員からは、復旧期（被災による生活の非日常から日常へ復帰する段階）における仮設住宅の課題として、以下の3点が提示された。①仮設住宅内のコミュニティが希薄であること、②子どもたちの居場所が失われていること、③保護者の精神的ストレスが子どもに影響を及ぼし、ときには虐待につながる恐れがあること。そこで、報告者らは、仮設住宅への訪問活動に取組み、子どもたちへのエンパワメントを目指した支援設計をおこなった。

今回の研究の目的は、その支援プログラムを実行し、その評価をおこなうことにある。

## 2. 研究の視点および方法

### 1) 研究の視点

この訪問活動は、長期化する仮設住宅での生活を予測し、継続的に子どもたちの生活環境の変化を把握することとし、子どもたちの復興（自立）段階に応じた支援プログラムの開発が必要であるとの下に設計された。イベントなどによる単発的な訪問とは異なり、ソーシャルワークの援助過程に則り、自立へ向けて子どもたちをエンパワメントしていく活動である。

### 2) 研究の方法

#### ①手続き

2012年8月に事前訪問をおこない、2012年11月から2014年3月までに定期的な訪問を実施した（実質21回、継続中）。この訪問活動は、報告者らに加え、ソーシャルワークを学ぶ学生も参加した。

活動内容は、仮設集会所にて自治会行事とする「ひろば」を開催し、遊びや物づくりをおこなった。その際、参加した子どもたちの様子を観察するとともに、自治会役員、主任児童委員や社会福祉協議会との定期的な情報の交換や共有をおこなった。

## ②支援設計

安梅のエンパワメント技術モデルに基づく目標・戦略設計の枠組みを参考に、仮設住宅に暮らす子どもたちのエンパワメント支援設計をおこなった。エンパワメント支援設計を図1に示す。

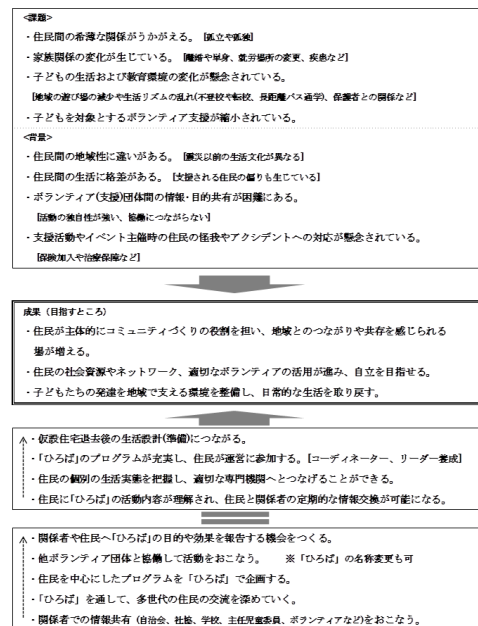


図1 エンパワメント支援設計

## 3. 倫理的配慮

訪問活動を通して得た被災者の情報は、支援に携わる関係者のみで共有し、個人が特定されることや外部に漏れることのないように十分な注意をおこなうこととした。

## 4. 研究結果

これまでの訪問活動を通して、そのプロセスをモニタリングするとともに、支援設計において設定したアウトプット(成果)を評価する。

### 1) 住民の主体的なコミュニティづくり

この仮設住宅に暮らす住民は、異なる地域生活や地域文化を営んできた住民の集まりであることから、住民間の関係を築くことが容易ではなかった。

### 2) ネットワークやボランティアの活用

この訪問活動では、支援関係者が定期的な情報共有をおこなったことにより、一定のネットワークの形成がみられ、ボランティアの活動についても議論する場ができた。

### 3) 子どもたちの発達をささえる環境

支援関係者のネットワークが形成されたことにより、支援環境の調整などは進んだものの、子どもたちが自ら意欲や自信をもって課題に取り組める状態にはなっていない。

## 5. 考察

結果からは、これまでの訪問活動は、今回の支援設計で設定した成果を十分にあげていないことがわかる。その原因としては、背景分析(アセスメント)で捉えた課題に対して、戦略が合致していなかった。多世代が交流する住民中心のプログラムの実施までに至らず、住民が活動の効果を確かめていく機会を設けることができなかったことにある。したがって、未だ支援環境の中でしか子どもたちは活動できず、エンパワメントを発揮する日常生活は取り戻せていない。